



# 「私の表現手段は写真」 元医師がとらえた視線の先にあるもの

医師・写真家

寺島萬里子さん | Mariko Terashima

かつて、埼玉県川口市には、鉄を溶かす溶解炉「キューポラ」の煙突が鋳物工場の屋根から突き出て、煙を吐き出していた。鋳物業で栄えた街、川口に居住し、その光景を見つめながら50年近く地域医療を担ってきた元医師、寺島萬里子さんは、医療に携わる多忙な日々を過ごしながら、還暦を過ぎて一から写真を学び始めた。人々を見守る医師としてのまなざしは、少なくなっていく川口の鋳物業や鋳物労働者たちの姿に焦点をあてる写真家の視線となって、記録し始めた。



「民医連の写真コンテストに出したら金賞をもらったので、私の写真もいけるんだと思って、写真にのめりこんじゃった」と寺島さん。写真を教わった現代写真研究所では、光と影をきちんと見ることを、モノクロ写真を通じて叩き込まれた。

## PROFILE

寺島萬里子 | てらしまりこ

1926年、三重県生まれ。東京女子医学専門学校卒業。1954年から医師として全日本民主医療機関連合会（民医連）川口診療所に勤務し、所長を務める。1987年に定年退職後は、70歳で引退するまで嘱託医として同診療所で治療にあたった。1990年に現代写真研究所に入学し、医師の傍ら写真家として活動を開始。鋳物業やハンセン病患者をテーマにした写真を撮影し続ける。写真集に「キューポラの火は消えず 鋳物の町・川口」「病癒えても ハンセン病・強制隔離90年から人権回復へ」「川口鋳物師 鈴木文吾」などがある。



## 地域医療に貢献

医師である寺島萬里子さんが川口へ来たのは1954年、27歳のときだった。地域の人たちが100円ずつ集めて開設した「バラックのような」診療所の所長としてである。それまで川口とは縁もゆかりもなかった。

「今だって豊かとは言えないでしょうけど、当時の川口は本当に貧乏でした。小さな鋳物工場がいっぱいあって、患者さんのほとんどが鋳物業に携わる人かご家族が中心でしたから、どうしても鋳物労働者に関心を持たざるを得なかったわけです。

鋳物労働は熱い炉と寒い外気の間を歩き来する大変な重労働です。高血圧や心臓病が多くて、毎年冬になると仕事場で、脳卒中を起こして倒れる人が一人か二人いました。当時は脳卒中を起こしたら動かしてはいけないというのが一般の人の常識でしたから、吹き抜けのトイレで倒れて医師が行くまでそのまま(笑)ということもありました」

寺島さんは診療の傍ら、職員とともに高血圧教室や糖尿病教室を開催して、医学知識の地域への普及と健康増進に尽くした。

「中でも一番問題なのはじん肺(※1)です。じん肺は治らない病気の仕事で辞めても徐々に進行する。ところが、私自身も経験したけれど、医大教育ではそのような職業病に対する比重が非常に低いのね。そのために、レントゲン写真を見てもじん肺という診断をつけてもらえない患者さんがものすごく多かった。

重度のじん肺患者が労災の認定を受けると、医療と最終就業時の給料の7割程度が補償される。それだけの収入があれば家の中での扱いも変わってきます。年を取ったおじいちゃんたちにとって補償を受けられるかどうかは天国と地獄。仕事を辞めて何年も経ってから徐々に重症化するので、そういう人を掘り起こして、じん肺の労災認定を取るといって一生懸命になりました」

## 写真という手段を選ぶ

「鋳物屋さんに対してはどうしても思いが行っちゃうのね」という寺島さんは、定年退職後は嘱託医として週4日勤務。患者を診る以外にも処理に忙殺されていた雑用から解放されて時間に余裕ができるようになった。

「その頃は世の中の産業構造も随分変わってきて、最盛期には700軒ほどあった鋳物工場が200軒台に減っていました。私が大事に考えていた鋳物業の人たちもどんどん減っていく。

川口は鋳物で栄えてきた街です。私が来た頃は人口の1割にあたる1万7千人が直接鋳物工場働いていて関連業も多かったから、街そのものが鋳物で成り立っていたような感じでした。そういう鋳物業の人たちの姿を目に見える形で残しておかなければという気がしてきたの」

その手段として、寺島さんは写真を選んだ。「63歳になって、本式に写真を勉強しました。テーマを持って写真を撮るには資料を調べ、



梵鐘とともに、鈴木文吾さん（右）と長男の常夫さん（左）。

人物を撮るときは、  
その人の一瞬のよい表情を  
どうとらえるか難しい。  
人を知ることだと思います。

ある「らい予防法」の廃止後は、人権回復と差別解消を目指した国家賠償訴訟の法廷に毎回通う。地道な努力は2001年の判決のタイミングに合わせて開いた写真展と写真集に結実した。寺島さんは撮影対象にどのような視線を向けるのだろうか。

「人物を撮るときは、その人の一瞬のよい表情をどうとらえるか難しい。人を知ることだと思います。

作業している人の場合は集中して働いている表情をとらえるようにしていたので、ある意味では楽でした。けれど、ハンセン病の方々に対しては人間として向かい合っていく中で撮らせてもらうので、難しかったですね」

ハンセン病についてはさらに、かつて植民地であった韓国や台湾の療養所の写真も撮影し始めていた。

「台湾に4回、韓国には1回行って、去年の夏、韓国にもう1度行くつもりだったのですが、夫の具合が悪くなってしまったので行けなくなって。1回の撮影ではまとめられる段階ではないんですよ。植民地の写真も八重樫信之さん（フリーカメラマン）がやっておられるし。私ももう81だからねえ。いつまで動けるかわからないので、写真家としての活動は諦めました。それはきちんと割り切った」

全力で打ち込んできたためだろうか、寺島さんの口調は潔い。それでも、「患者さんを診て治す以外に、何かの病気についてきちんと研究するといったことは、じん肺に対していくらかやったぐらいで、医者としては恥ずかしいわね。子育ても、主人の妹が家事一切をしてくれて、私は朝食とお弁当をこしらえるだけだった」と言う。「24時間、医師であれ」という教えを守りながらの家庭生活との両立は、並大抵の忙しさではなかったはずだ。70歳まで医師と写真家の二足の草鞋で活躍してきた原動力は、使命感なのだろう。

## 政策史を盛り込むという課題

現在、川口に残っている鑄物工場は100軒に満たない。「キューポラのある街」から消えていった鑄物工場の跡地には、次々と高層マンションが建てられている。

「昔と今のどちらがいいかといえば、住民にとっては公害もないし街もきれいになった今のほうがいいかもしれません。空は本当にきれいになりました。それは、日本全体の変化と通じます。けれど、昔の長屋のような親密な近所づきあいはなくなりました。

写真を始めた頃は鑄物に対して思い入れが

強かったですね。けれど、川口の街が変わってくると、時代は変わるものなんだ、仕方がないんだとドライになってきました」

しかし、電気溶接炉を使った近代的な施設の稼働、炉の共同使用などで生き残る工場や鑄物業を目指す若者の出現など、寺島さんは「鑄物業の将来はそう暗いものではない」と見る。

医師としては「ミスを犯さないように」と70歳で引退し、写真家としての引き際も自分で決めたが、ハンセン病療養所の写真については、課題が残っている。

「韓国と台湾での写真は、ささやかな形でも整理をしようと思っています。もしも写真集を出すとしたら、植民地のハンセン病政策史のようなものを入れなければならないと思っています。そのためには本を読み、調べないと。ただ、韓国は文献があるのですが、台湾のハンセン病政策史が書かれたものがなくて…。やっぱりやりかけたことは死ぬまでに何とかしたいという気がしますね(笑)」

川口の街を見守る寺島さんの視線は、活動を退いた今も変わらない。そのままざしが焼きつけた光景がどのような形で表現されるのか、楽しみに待ち続けたい。

Text by : 藤野未央



写真上：最後の鑄物師、鈴木文吾さんは、自ら製作した代々木競技場の聖火台を毎年磨きに行っていた。奥さんとともに写っているのは珍しい。  
写真下：仲間や家族が総出で梵鐘の湯入れをしているところ。

関係者のお話も伺わなければならないし、お一人お一人とも深くお付き合いをして、鑄物にかける思いなども知ることができたので非常に良かったですね」

気のいい鑄物職人たちは「いつでも撮りにおいで」と快く作業工程を見せてくれた。寺島さんは工場の中に入って作業中の横顔を、細かい手仕事を、休憩中の姿を、鉄を溶かして製品に仕上げる「吹き」の作業を、鑄物職人である鈴木文吾（※2）さんを撮影し続けた。資料価値の高いものも含まれるモノクロの写真群は、現場の迫力と力強さにあふれている。

## 毅然とした姿に魅せられて

鑄物をずっと撮影するつもりが、ハンセン病療養所を訪れ、在園者と知り合ったことがきっかけになり、その記録を残すことにも関心が向いた。

「非常にショックを受けました。私自身、知らないことがあまりに多すぎてほっとけないと思ったんです。私の表現手段は写真だから、写真で知っていただくしかないと思いました。皆さん、毅然としていらっしゃる。気の毒とかそんな感じじゃない」

その姿に魅せられ、群馬県草津町の国立療養所栗生楽泉園に通いつめた。隔離政策で



『キューポラの火は消えず  
鑄物の町・川口』  
寺島萬里子著  
光陽出版社 3059円(税込)